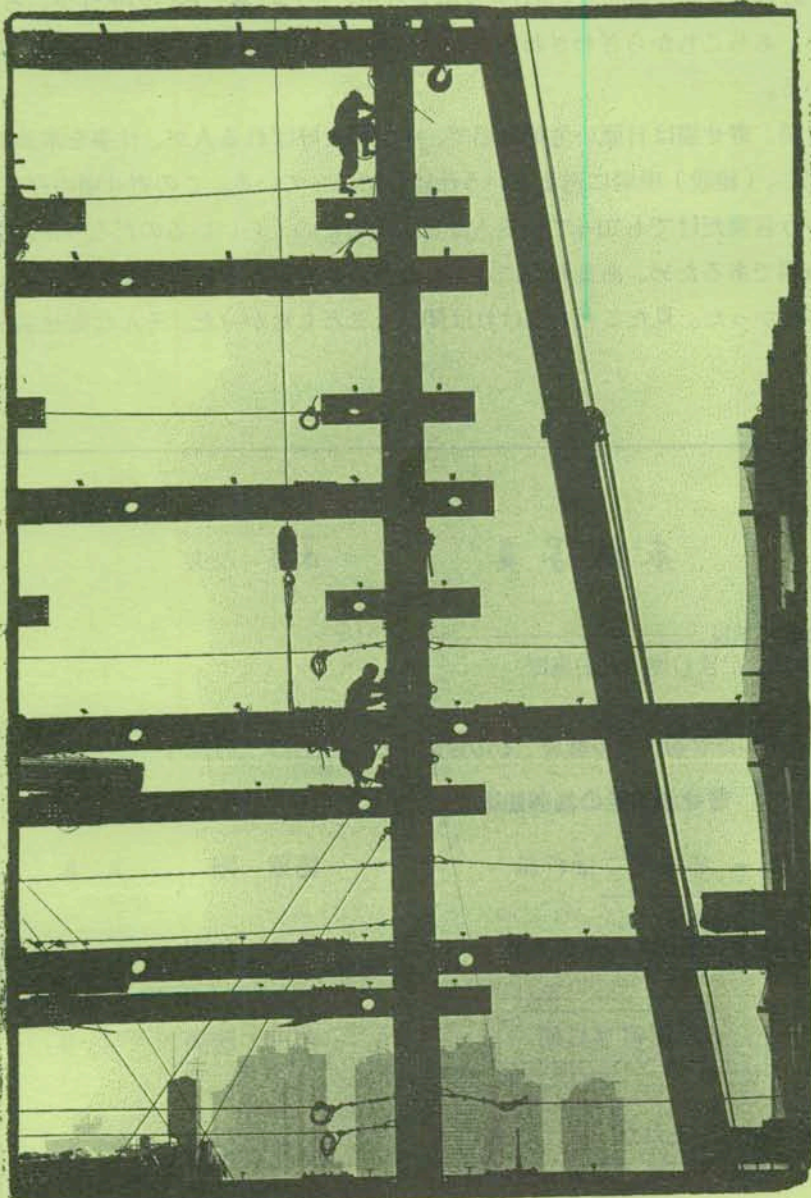


1998年10月31日発行

新宿ダンボ ル村通信

第12号



新宿
写真館

吉田 勝美

連載論文
佳境に入

特集

「寄せ
場」

高田馬場

編集・発行 新宿連絡会

定価 300円

ある朝の寄せ場

午前六時、公園が最もにぎわう時間だ。400人を越えるかと思われるくらいの男性がいる。女性は一人もいない。あちこちからざわざわと話し声、笑い声が聞こえる。黙って手すりに腰かけている人もいる。

そう、ここは寄せ場。寄せ場は日雇い労働市場で、手配師と呼ばれる人が、仕事を求めてやってくる人を手配し、(建設)現場に送るという仕組みになっている。この寄せ場の存在、あるいは寄せ場という言葉だけでも知っている人は日本中でどのくらいいるのだろうか。寄せ場は違法な労働市場であるため、あまり公にはされない。私も山谷や新宿に関わるまでは寄せ場の存在を知らなかった。見たこともなければ聞いたこともなかった。そんな寄せ場を今回初めて訪れた。

表紙写真

木暮 茂夫

<ザ・仕事> 前編
寄せ場 たまり場 高田馬場

ある朝の寄せ場 その情景 その背景 出口 万記子 1

寄せ場用語の基礎知識 5

インタビュー 寄せ場こぼれ話 稲葉 剛 6

「戦後」と「貧困」の高田馬場 笠井 和明 7

新宿写真館 吉田 勝美 9

底 辺下層に組み込まれた
労働者がたどる最下層の環流点 笠井 和明 11

その情景　その背景

出口 万記子

寄せ場の朝は早い。午前三時、いちばん早い手配師がやってきた。辺りはまだ真っ暗で、静かで、少し寒い。手配師は車を止めてしばらくぶらぶらした後、車の中に戻り、中で待機している。公園にはベンチで寝ている人以外に人影はない。四時、次の手配師が来た。手配師二人とその手伝いの人が一人的三人グループのようだ。公園のはし、仕事を求めてくる人が一番多く来る場所に立って、来る人をじっと見ている。大抵は決まった人、顔見知りの人を連れていくらしく、その知った人が来ると車に乗るように言っていた。手配師に聞くと、「顔見知りの方が信頼できるから」ということだ。「連れていく人の条件は、年齢が若いこと、見た目・格好が悪くないこと、礼儀正しいことの三つ」だという。「そうでないと現場行っても雇ってもらえない、最近会社うるさいから。誰でもカレでも連れてきゃいいってわけじゃない。」といていた。手配師は話をしている間もずっと、公園に向かってくる人をじっと見ていたので、そのわけを聞くと、「公園に来る人の歩き方と格好を見れば、だいたい鳶だとか、土工だとか分かるから。」といていた。私も同じように公園に来る人をじっと見てみたが、何がどう違うのかさっぱり分からなかった。手配師はたばこや缶コーヒーをくれた。五時になると、公園にやってくる人がちらほらと増えてきた。公園のそばには6台のバンが停まっている。だいたい1台に10人弱ずつ乗り、現場に向かう。まだ辺りは暗い。手配師のグループと仕事を求めてくる人との間では、「おはよう」とか「今日(仕事)ある?」といった会話が時々交わされていた。

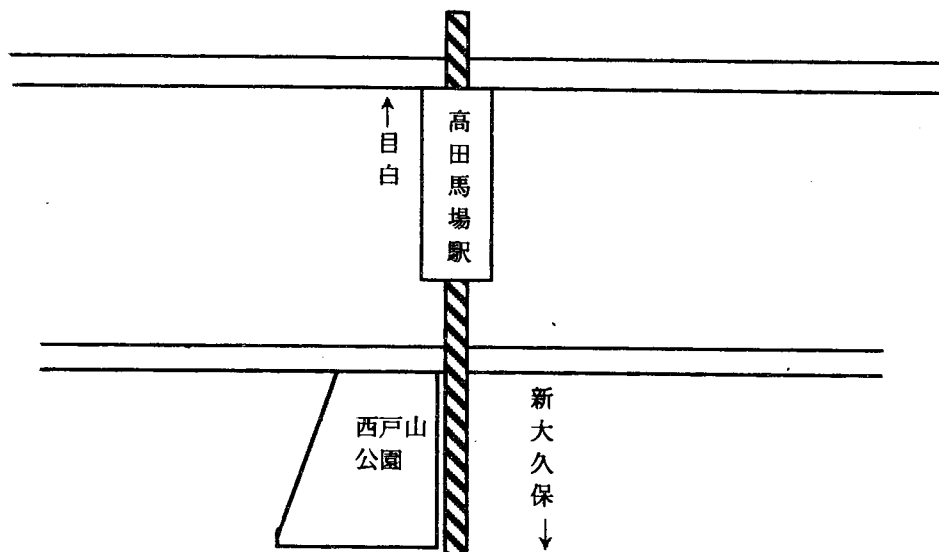
手配師に仕事について聞くと、手配師の仕事は365日休みなしで、夜は八時か九時に寝て、朝は三時に起きて、四時頃公園に来る。そしてこの、朝の三時間弱の手配の仕事が終わった後は家に帰り、昼間はパチンコか、かけごとか、寝るか、という生活、だそうだ。何人かの手配師の人に話を聞いたが、だいたいこのような毎日を送っているようだった。また、手配師の人に共通して感じられたのは、孤独だった。これは野宿している人と接する限りは感じられなかった種類のものだった。手配師は家族を持たない単身の人が多いようで、寝る場所もあり食事もできるけど、女性や子ども、あるいは友人というものと接点がないようだった。そういう孤独だった。野宿している人の孤独と何が違うんだろうと考えると、野宿している人の孤独は世間から切り離されたような孤独で、それに野宿をしている人にとっては孤独感もさることながら、それ以上に寝る場所や食べ物の確保の方が問題だからじゃないかと思った。また、野宿している人の中には仲間を持つ人も多いしなあと思った。

そうこうして五時半になり、空が明るくなりかけると、公園に来る人が増えてきて、来る人の列ができ、その列は途切れることがないくらいになった。次から次に人が来た。びっくりした。こんな朝早くに、いつも私が寝ているこの時間にこんなにたくさんの人が仕事を求めて公園に集まっているなんて、知らなかった。また、来る人と反対に公園を去っていく人もちらほらいた。来る人はだいたいみんな小さめの荷物を一つ持っている。二つ三つとたくさん荷物を持っている人は誰もいない。一つの鞆に仕事に必要なものだけを入れて持ってきている様だった。また、公園のそばの路上ではベルトや幾種類もの軍手や足袋を売っている人がいた。

六時、公園が最もにぎわった。400人の人はいたのではないだろうか。昔からのこの公園の寄せ場を知る人は最近では人が少なくなった、昔はもっと多かったと言うが、初めての私にとってはとてもたくさんの人だった。公園を歩くとざわざわざわざわと話し声、笑い声が聞こえた。その一方で、黙って座っている人も多かった。一人でいる人何人かに声をかけてみたが、取材と思われたのか、あまり話をしてくれる人はいなかった。ただ、一人の人は、毎日公園に来て手配師と知り合いにならないとなかなか仕事には行けない、と話してくれた。私は寄せ場に行つてうろうろしていて、手配師の人に話しかけられることはあったが、仕事を求めて来ている人に話しかけられることは一度もなかった。公園の周りには12、3台の車が停まっていた。通りがかったタクシーの運転手が不思議そうに公園の人ばかりを見ていた。六時半になると仕事に行く人を乗せた車はほとんどが出発し、仕事につけなかった人は公園を去りだした。公園はだんだん静かになっていった。

私が今回訪れた公園の近くには日雇い専門の職安があり、そこでの仕事の紹介の時間は六時から七時の間だと聞いていたので、職安の方に行ってみた。六時半過ぎで、たくさん人がいるだろうと想像していたが、職安を訪れる人はまばらだった。代わりに、職安の側でも手配師による手配が行われており、また、闇印紙を売っている人もいた。

ここで、この日雇い専門の職安について少し触れてみたい。職員の人には寄せ場を訪れた日とは別の日の午後に話を聞いた。この職安の正式名称は新宿公共職業安定所高田馬場労働出張所といい、ここでは日雇い労働被保険者手帳（通称、白手帳）を持つ人に対して、日雇いの仕事を紹介している。土、日、祝日は休みで、月曜から金曜までの朝六時から七時までが業者からの求人の受付（当日に連絡が入るのがほとんど）、その紹介の時間となっている。紹介する仕事は建築関係で、片づけ、清掃、土工が多く、一ヶ月に一人の人が仕事に就けるのは平均一日か二日だということだ。「バブルの頃は求人も多く、人が足りないときもあったが、今は求人が少なくなった。業者側も本当に人が足りないときにしか求人しない。」と職員の人が言っていた。この職安に来るのは年輩の人が多く、統計はないが平均年齢はだいたい60歳ぐらいだそうだ。50歳なら若い方だという。昔から日雇いをしてきた人が多く、そうした昔からの人が高齢化しているということの様だ。現在は紹介する仕事が少ないため、新しく手帳を発行することはほとんどない。また、来る人の印象について聞いたところ、実際の年齢より上に見える人が多いとのことだった。この職安は手帳を持っている人しか利用でき



ない上に、手帳を持っていてもほとんど仕事に就けないという状況で、あまり機能していないように思われた。職安も業者に対して日雇い労働者を雇うように促したりしているが、なかなか求人がこないという状況の様だ。

そして七時過ぎ、公園に戻ってみると3、4人の人がいるだけで、ひっそりとしていた。3人の人が掃き掃除をしていた。さっきまで仕事に就けなかった人がたくさん公園に残っていたのに、みんないつの間にかどこかに去っていた。この日、何人の人がこの寄せ場から仕事に行ったのだろうか？公園や職安付近にいた手配師は全部で8、9人、停まった車は20台くらい、手配師は多い人で一日平均30人の人を手配する、1台の車に乗るのは10人弱、と色々考え遣わせると、この日、公園と職安付近から仕事に行った人は200人くらいではないだろうか。公園に来たけど、仕事に就けなかった人はこの倍くらいだろうか。そんなことを考えながら、私は静まり返った公園を見て、なんだか疲れ果てて、とぼとぼと歩いて帰った。前日、まともな食事をせず、睡眠もほとんどとれなかったせいかな、ふらふらしていた。たった一日、野宿生活の真似事をしただけで、こんなに疲れるとは思わなかった。

取材を終えて、寄せ場って男だけのアンダーグラウンドな世界だと感じた。女はいなくて、決してみんなに知られることのない空間。取材も許されない雰囲気だった。最後に、私はこの文章を書くまでに二回しか寄せ場を訪れることができなかった。そのため、この文章はあくまでも初心者の私を感じた寄せ場の一部分にすぎない。寄せ場には私の見ることでできなかった面がまだまだたくさんあるだろうと思う。

寄せ場用語の基礎知識

- 飯場（はんば） 新聞等では「作業員宿舍」と書かれる会社の寮のこと。
- 契約／出張 「契約」は一定期間、同じ会社で働くこと。「出張」は遠方の場合。
- 直行 一つの現場に直接働きに行くこと。
- 現金 一日ごとの仕事。その日の仕事が終われば賃金が現金でもらえる。
- 白手帳 雇用保険日雇労働被保険者手帳。二ヶ月間に26枚の印紙を貼ると三ヶ月目から「アプレ手当」（失業保険）がもらえるが、手帳の登録に住民票の提出が義務化されているため、新宿では白手帳を保持する野宿労働者はほとんどいない。
- 顔づけ 寄せ場において手配師や社長が顔見知りの労働者に声をかけて優先的に雇うこと。最近の高田馬場は顔づけが多く、新入りが仕事につけない。
- デズラ 「出面」と書く。日払いの賃金のこと。高田馬場の最近のデズラは、「土工」で9000～13000円。
- ヌキ／コミ 「ヌキ」は「食い抜き」のことで、食事を含まない賃金。「ヌキで7000円」とは飯場で食事を食べて手取りが7000円ということ。「コミ」の場合は、額から食事代等を差し引かれる。
- ケタオチ 賃金が極端に安い現場・業者のこと。転じて条件や待遇の悪いもの一般にも使う。使用例：「あそこの福祉(事務所)はケタオチだ。」
- コンクリ打ち コンクリート打設作業。生コンを枠に流し込む際の諸作業。
- ネマキ 仮枠と床の隙間にコンクリートがもれないようにモルタルで埋める作業。
- ネギリ 「根伐」と書く。ピルの基礎工事として地面の掘削をおこなうこと。穴掘り。
- ネコ 運搬作業用の手押しの一輪車。
- ユンボ ショベルカーのこと。
- トンコ 飯場などから逃亡すること。使用例：「行ってみたらケタオチの飯場だったのでトンコした。」
- ボーシン 「棒心」と書く。飯場・現場の世話役。
- 追い回し 現場監督や棒心が暴力的に労働強化を強いること。契約が終わりに近付くとわざと追い回しをして、トンコさせ、賃金を払わない悪質業者もある。

*作成にあたり、寿支援者交流会編集のパンフレット「こんにちは フリーコンサートに参加したあなたに（1998年版）」を参考にしました。（寿支援者交流会の連絡先はTEL/FAX 045-641-5599）

はじめる前は。今は200人いて、せいぜい仕事ありつけるのは三分の一。三分の一ありつけるといいほうじゃないの。それも「顔づけ」で決まった人しか使ってくれないから。初めての人じゃダメ。これから馬場がどうなっていくか。俺もそれをよく考えるんだけど。景気がよくなりゃいいけどね。今でも野宿している人もけっこう来てるからね。俺が知ってる人も5人くらいいるからね。5人じゃきかないかな。野宿して、炊き出しももう列に並んだりしてるけど。

30代の人、友達いるけど、一ヶ月以上（仕事がない）って人もいる。仕事は真面目なんだけど。真面目っていうのは見るだけじゃわかんないからね。使ってみてくれないと。

仕事っていうのは生活するための仕事だからね。食うためには仕事しなくちゃならない。俺も仕事さえあれば、福祉なんか受けたくはない。仕事しているほうが気が楽だ。

（聞き手・稲葉）

寄
せ
場
こ
ほ
れ
話

現在は福祉で下ヤ生活をして
いる藤田さん（仮名、64歳）
のお話

仕事しているほうが
気が楽だ

東京は新宿の生まれで、小学校二年の時、戦争で群馬に疎開した。そのまま新制中学校を卒業するまで向こうの学校に行っていた。中学卒業して、こっちに戻ってきてて神田の電気専門学校に入学して、卒業してからはずっと電気工事をやってた。55歳ころまで。55歳以上だともう使ってくれない。電気関係はだいたい50歳どまり。大手は別だけど、我々は下請けの下請けだから。

電気屋をやっているころは日本中全部を回った。外国にも。50歳の時は中近東へ。シリアもトルコも行った。「50歳以上はできない」というのでストレスだった。一年の予定だったけど、イラン・イラクの戦争で半年で抜けてきた。

電気屋やめてからは土木関係。馬場に行くようになったのは、人に紹介されて。そういうところあるとは知らなかったから。やったのは大体、鉄筋ビルの関係。まず

一番は川口のそごうデパート。一番最初から入って、ずうっといた。一年半ぐらいかかった。赤羽のカプセルホテルに泊まって通勤した。それが終わって、馬場に戻って、一日一日仕事探して。去年まで（期間が）長いのばっかり。多かったのはマンション建築。長かったのは恵比寿で、一年。その時は田端のカプセルに泊まって通勤。そんな感じで日払いでもらってはカプセルに泊まるというのを繰り返していた。

俺は行く時は会社じかだから、手配師はあまり知らない。会社の専務とかが馬場に来る。行き始めれば同じところばかり。一回馬場から行って、向こうの世話焼きに見込まれて、「直行できるか」と言うのと、「できます」と言うんで、次からは馬場通

さずにじかに行っちゃう。そのほうが安定するし。

現場の仕事はなんでも。主にコンクリ打ち。それが一番大きい仕事やね。あとは雑仕事。「あれやって下さい、これやって下さい」で。「石折り（はつり）」もやるし。コンクリをでっばっているのを削るわけだ。内部の足場かけもやる。とにかく工事現場は何から何までやらせるから。設備以外はね。

そんなこんなで今年の二月までは順調にいった。3月からピタッと切れちゃって。そのころから宿銭払えなくなっちゃってアオカンになった。それから週一回あればいいほう。若けりゃ、手配師が「仕事いかねえか」と言うけど、60過ぎれば言わなげね。前行ってた会社も（馬場の）ヤマに来なくなった。来たって一人か二人しか使わない。10日に一回くらいしか来ないから、いつ来るかもわからない。

だいたいあそこ（馬場）行くのは4時半。4時に新宿出て歩いて。数えたことないけど（労働者は）200くらい集まってんじゃないの。昔もそのくらいいたけど、ほとんどアブレることはなかった。パブル

「寄せ場」

「戦後」と「貧困」の 高田馬場

笠井和明

「寄せ場」と聞いて何かしらの光景が頭をよぎる人は今日あまりいないことだろう。

「寄せ場」とは何かと識者に聞けば、『全国から折出され、仕事を求めて移動する労働者の集住地域、「流動的下層労働力密集居住区」(船本洲治)である。』(『「寄せ場」研究の諸問題』青木秀男—日本寄せ場学会年報<寄せ場>1号1988年)などという代表的な答えが返って来ることだろう。

「寄せ場」に関しては、様々な論文や運動の言葉などが発せられて来たが、「寄せ場」を知り、「寄せ場」を語る人々の言葉のニュアンスの中には、「寄せ場」という場が何か特殊な場所であるかのような印象を常々聞く側に与え、寄せ場=日雇労働者=ドヤ街=青空労働市場というような一面的なイメージを一般に多く植え付けて来た感が強い。

このように硬直された特殊用語は地域に固定化され、更に硬直の度合いを増す。寄せ場=山谷、寿、笹島、釜ヶ崎、寄せ場労働者=それらの地域に住む日雇労働者、という風に。

ドヤという居住形態でなければ、そこにいくら仕事を求めて移動する下層労働者が集住していようが、そこは「寄せ場」とは呼ばれない。新宿のダンボール村も隅田川のテント村も、戸山公園や上野公園のテント村も。

識者が言うのは、「寄せ場」の求心力がなくなり、労働者が「寄せ場」で暮らして行けずに野宿集住地へと分散した形態という解釈が一般的である。あくまで「寄せ場」は「寄せ場」でなければならぬらしい。この場合の「寄せ場の求心力」とは、一般的な求人数の減少という意味ではなく、治安政策的ないしは労務政策的な意味である。これはある意味では何等かの地域支配から解放されるという人間の発展面において喜ばしきことなのであるが、その観点からは注目されず、なぜか常に「寄せ場」が解体過程にあることだけが問題とされる。

山谷、寿、笹島、釜ヶ崎は戦後の為政者の意図により作られた「寄せ場」であることは史的に明らかである。平たく言えば高度経済成長をめざす一般社会の害にならぬよう、失業者、半失業者などが「囲い込まれ」、一般社会のために酷使されてきた空間である。その「寄せ場」

を自ら解体し解放すべき試みは、その硬直化した「寄せ場」性ゆえ、他の地に自らが作る「寄せ場」の積極性に凌駕されつつあるのではないか。そして、政策としてタガの外れた日雇市場は軸心を失いつつも、その流動にあわせ追従し変化をするが、それにすら追いつけずにいる。

「寄せ場」の解体とは唯、政策面での解体に他ならない。だから、「寄せ場」は本質的に解体しているのではなく、外に自由に発展しているだけの話しである。

「寄せ場」的なものは、山谷や釜ヶ崎だけにあるのではない。都市なればどこにでもそれはある。山谷のよう政策的に管理されていない野放図な、ありのままの「寄せ場」にこそ、本来の「寄せ場」(人の寄り集まるバイタリティと可能性)の姿があるのではないか。安易に山谷や釜ヶ崎を語るのが「寄せ場」の発見でもなんでもない。電車を乗り継いでかの地に行くくらいだったら、歩ける範囲の街中に隠れた「寄せ場」を発見した方がよほど「寄せ場」の意味が分かることだろう。

新宿高田馬場の青空労働市場は、東京の隠れたもう一つの「寄せ場」である。JR高田馬場駅周辺、新宿職安高田馬場出張所周辺、そして区立西戸山公園の周辺には、早朝から仕事を求める数百のオッチャンらが集まり、手配師により、車や電車で都内や近郊の建築現場へと向かう。そして、それが一段落したら、団地から通勤者が駅に向かい、電車からは学生が排出される。時間にして早朝の数時間が、馬場の「寄せ場」の姿である。

何故こんな所に「寄せ場」があるのかとよく若い世代の人は疑問を呈するが、西戸山公園周辺をよくよく歩いて見れば、なんとなく理由が分かるものである。都内では有名な集合住宅である都営戸山団地群、軒を重ねた小さな屋根が続く住宅街、ポツリポツリとまばらにある古ぼけた小商店、雰囲気一場違いな高層住宅、この街が決して裕福な街ではなかったことは誰にも分かる。歴史を紐解くと長くなるので省くとしても、底辺下層史的に根拠のない場所に「寄せ場」はない。

都営住宅の建て替えがつい最近始まり、今後、職安前の道路整備なども進む予定である。再開発という程の激変はないだろうが、けれど戦後の光景がひとつひとつ失われる中では、この「寄せ場」もかなりの変遷を遂げざるを得なくなるだろう。建設不況の中、かつての活気は失い、山手線から見える西戸山の焚き火が消える日も近いだろう。労働出張所への登録者も三百を割り、草ぼうぼうの職安が機能停止になる日も遠くない。

が、無論、歴史というのは、そう簡単には停止しないものであることも事実である。底辺の執念は、この就労の場をなんとか確保し続けている。「貧困」がことごとく解体されつくした新宿の街で唯一戦後をありのままの姿で象徴し続けている馬場の「寄せ場」を。



オギちゃん（16才）は、焼酎を飲み過ぎ、胃に穴が開いて新宿の大久保病院にかつぎ
込まれた。新宿西口で一番めだつ女装好きのオギちゃんの異様な風体に圧倒され、路上
に住む同じホームレスの中にも彼を避ける人も多くいた。
「いいから遠慮しないで冷蔵庫の中に桃があるからお食べ！！オレも早く治って西口に戻
りてえよ」

新宿写真館

No. VI

写真・吉田
勝美



お姉言葉と茨城訛りが混じり合う独特な語り口と、細かな気遣い、初めて見るすっぴ
んのオギちゃんの顔で見舞に行った私の頭の中は混乱した。

女装のほかにも人目につく趣味がある。人形やキャラクターグッズ、カツラ、カワイ
イ置き物などの収集物を独特なコレクター眼で集め展示する事。4号街路からインフォ
メ前に居を移しても、自分の回りを取り囲む物はほとんど同じ様なもので、段ボールハ
ウスの住民の中でもっとも目立つ存在だった。

底辺下層に組み込まれた

路上

考察

からの

その5

Ⅴ、都市下層の変貌と異端視

中川清は「日本の都市下層」(1985年)の中での綿密な分析から、大正期における都市下層から工場労働者の上昇分離を次のように規定する。

「…大正10年ころには、典型的な工場労働者はほぼ完全に都市下層から分離し、他方、都市下層は明治末から大正初頭にはなお有していた一般性を喪失し、都市下層と工場労働者は相互に異なった階層として位置づけられるようになった、と結論することができよう。」

『しかしながら、第一次大戦後、中小零細工業が発展し、また「臨時工」や日雇労働者が増大しており、これら労働者の多くは、典型的な工場労働者と同じ生活構造を有していたわけではなかった。(略)…以前には未だ残っていた工場労働者の「下層社会」の性格が失われてきたものの、労働者全体と下層社会が必ずしも明確に二分されたのではなかった点に留意しなければならない。このような形で分化しながらも、それぞれに形成されてきた都市下層、「下層労働・階級者」、工場労働者、「新中間層」という都市諸階層こそが、新たな都市状況の担い手となったのである。』

「要するに、都市下層は、そこから工場労働者が増大したことに端的に示されるように、大正中期の生活変動の過程で、明治中期以来の他の都市諸階層にも共通する一般性をほぼ完全に喪失し、変動過程で取り残された層として都市諸階層の中で相対的下位に位置づけられるに至った。」

日露戦争から第一次大戦にかけてこの時期、日本の資本主義は独占資本主義に移行する諸前提を作りあげたとされている。当時の国際関係と列強諸国との抗争戦の中、軍事力の増強、工業生産力と輸出能力の強

労働者がたどる最下層の環流点

笠井 和明

化は、国の明暗を分けた課題であった。とりわけ軍拡競争による列強の巨艦建造ラッシュは、重化学工業の飛躍的發展を急がせて行く。軍工廠、製鉄、鉄鋼などの官営工場を拡張するに止まらず、財閥資本に投資させるなど、「上から」産業の大規模再編を国策に順応させる形で強行し、後の財閥独占の端緒を開き、朝鮮半島や中国への覇権もまた安価な原料資材確保のため凶暴さを増し、植民地主義へとめり込む端緒を開く。国内産業都市もこの過程で全国的に再編構築され、それに伴い、電機、水力発電事業、電燈、電鉄、炭鉱、セメント、製紙業なども飛躍的に發展した。

これら産業の激動的な再編は、階級構成をいちじるしく変化させ、片や「鉱山成金、造船成金」がもてはやされ、片や貧乏人が社会の底辺で呻吟するという貧富の格差をこれまで以上に広げ、「工場労働者」による「労働運動」の続発や、組合政治や政党政治の再編、そして、間断なく押し寄せる景気循環の波や、構造的な矛盾を露呈した農業危機を経ながら、「大正デモクラシー」と呼ばれる政治の激動に至る。

都市と、その構成員はこの時期大きく変貌を余儀なくされたのである。

都市下層はこの時期増大する土木建築、運輸などの日雇労働市場に依拠しながらの生計を主要には立てていくこととなる。もちろん、伝統的な都市雑業が衰退して行く中でも、古物商、行商、露天商、人力車夫やその他の雑業などは、産業や都市構造の中に組み込まれ、その従事者が消えた訳ではない。かつての貧民窟にあった雑多な生業が、多少資本主義的に整備されて行く過程とでも言おうか、そういう過程を経ながら、都市下層は都市の底辺下層からの担い手、すなわち階層としての位置を確保することとなる。

何故かと言えば、産業の發展や、独占資本主義の確立も、都市下層全般を「新中間層」や工場労働者へと上昇分離させ得なかったからである。農業を資本主義的に發展させ得ず、国内市場を偏狭せしめることを規定した寄生地主制を土台とした半封建的農業関係を維持せざるを得なかった矛盾と同様に、都市下層社会も順当には資本主義化を計れなかったからである。しかし、それを良い事に、そういう二重構造をも支配の中にこの国はスッポリと包み込む。都市下層は利潤の源泉として、「工場労働者」とは位相の違う階層として、違う支配の仕方でも温存され続けて行く訳である。

職業構成（大正中期の比較）

| | 3区「細民」 | 東京市（旧市域）全体 |
|------------------|-----------------|---------------------|
| 農業、水産業 | 1.7 | 1.0 |
| 鉱業、工業 | 57.0 | 39.2 |
| 商業 | 11.0 | 31.0 |
| 交通業 | 13.0 | 6.6 |
| 公務、自由業 | 3.4 | 11.8 |
| 家事使用人 其ノ他ノ有業者 | 0.9 | 2.3 |
| | 13.0 | 8.2 |
| 合計 | 100.0% (863) | 100.0% (977,239) |

東京市全体は、大正9年の『国勢調査報告府県の部 第一巻東京府』第5表による。

都市に滞留し、また都市に流入してくる下層民の群れは、産業から見れば、まさに金蔓と言える存在であっただろう。都市が「寄せ場」だとすれば、不況下の青空労働市場よろしく、手配師たる産業は、自分の好みと条件で人をあげられる。しかも、取り残された人々には何等責任を感じる事はない。取り残された人々にはそれに見合った、不安定ながらも死なない程度の現金収入のある労務市場と貧民街があり、死なない程度の雑業もある。無論、ルンペンになろうが死んでしまっても構わない。「工場労働者」さえ確保しておきさえすれば、あとの労務は誰でも良い。出来れば安くこき使えばなおさら良い。まさしくそんな絵である。ここでよく語られるのが、マルクス「資本論」による「相対的過剰人口論」である。もちろんこれは原理論であって、日本の資本主義化の現状分析にそれを当てはめてもあまり意味はないとは思いうし、日本的二重構造の最底辺を一貫して形成してきた都市下層の性格を逆にあいまいにする根拠ともなる。ここで言われているのは産業資本段階では、資本の蓄積に適応した労働力人口を産業が確保するという法則から言えば、資本主義が資本主義である限り避けられ

ない景気循環の中で相対的過剰人口の存在は必然的であるということである。これを一般的に「恐慌で掃き出され、好況で復帰する失業者群」というような規定をする。もちろんそういう構造がないと言う訳ではないが、それを論拠のベースにすると都市下層は一般的な失業者群という規定にしかならず、私がわざわざ書きしたためてきたこれまでの下層史は極めて単純な構造になってしまう。無論、そんな単純な構造では日本の底辺下層は理解し得ない。「搾取あるかぎり貧困もある」という単純な論理も、その具体的現われは実に複雑怪奇なものであり、とりわけ日本の資本主義化などは一般性と特殊性のないまぜ状態とも言えるだけ、その複雑怪奇に立脚しない限り我が下層の解放の道程は見いだせないだろう。

問題となるべきは原理から現象を当てはめることなく、失業問題一般として解消はしないわが国の下層の複雑さとその根拠をまず理解することではないか。

横山源之助の死後、下層社会研究の第一人者は草間八十雄であると言われている。彼は大正中期から昭和初期にかけ、東京市、東京府が行なった貧民調査に嘱託として加わるなどし、貧民街、浮浪者、売笑婦、バラック、水上生活者の夥しい研究を、調査資料として世に残した。草間の観点は「多数の貧民が存在するといふことは、社会生活の健全たる維持及び進展に多大の障碍を来すことは明瞭であって、ここに貧民或は細民の問題なるものが生じてくる。こうして貧民問題の起るのは、貧しい人々の悲惨なる生活を目前に救済することを含むのは啻々するまでもない。従って之を社会自身の問題とするところに貧民問題の意義を生ずるのである」『余は貧乏の救済並に緩和の

世帯主(1)は、『東京市内の細民に関する調査』43頁～49頁による。

| 職業分類 | | 職業構成 (大正中期の「細民」) | | | | |
|------------------|------------|-------------------|-----------------|-----------------|----------------|----------------|
| 大分類 | 細目 | 世帯主(1) | 世帯主(2) | 配偶者 | 世帯主夫婦以外の有業家族 | |
| | | (10区) | (3区) | (3区) | 男子(3区) | 女子(3区) |
| 農業, 水産業 | | 1.5 | 2.6 | — | 2.2 | — |
| 鉱業, 工業 | | 35.2 | 47.9 | 61.2 | 74.4 | 85.3 |
| | 窯業, 土石加工 | — | 2.8 | 3.0 | 18.9 | 8.0 |
| | 金属工業等 | 3.6 | 4.8 | 0.5 | 12.2 | 1.3 |
| | 紡織工業 | — | 1.2 | 10.9 | 2.2 | 4.0 |
| | 被服, 身装品製造 | 4.8 | 6.4 | 35.3 | 2.2 | 26.7 |
| | 土木建築 | 7.4 | 24.1 | 3.5 | 12.2 | — |
| | 「職工(各種)」 | 15.7 | * | * | * | * |
| 商業 | | 7.8 | 12.1 | 11.9 | 8.9 | 4.0 |
| | 「古物商」 | 7.8 | * | * | * | * |
| | 「行商」「露天商」 | 18.2 | 20.1 | 2.5 | 6.7 | 1.3 |
| 交通業 | | 10.9 | * | * | * | * |
| | 「人力車夫」 | 6.6 | * | * | * | * |
| | 「荷車挽」 | 1.2 | 3.8 | 3.5 | 3.3 | — |
| 公務, 自由業 | | — | — | 1.5 | — | 6.7 |
| 家事使用人 其ノ他ノ有業者 | | 36.1 | 13.5 | 19.4 | 4.4 | 2.7 |
| | 「人夫(日雇)普通」 | 31.3 | * | * | * | * |
| | 「雑業」 | 3.2 | * | * | * | * |
| 無業 | | — | — | — | — | — |
| 合計 | | 100.0% (2,395) | 100.0% (497) | 100.0% (201) | 100.0% (90) | 100.0% (75) |

方法に関しては、後者の社会政策に従ふものにして、常にこれを唱へて已まざるものである。「どん底の人達」昭和11年」というものであった。常識的かつ良心的な社会政策論者とでも言おうか。

内務省地方局が都市の細民調査を開始したのは明治44年、東京市が細民調査を開始したのは大正9年と、貧民問題の一般化の中、行政サイドからの調査がこの時期相次いで行なわれる。これらの調査は、労務政策的には市営の職業紹介所と労働宿泊所、無料宿泊所の開設、更生政策的には救護法の制定、民間社会事業の活用、住宅政策的には不良住宅地区改良事業などとして政策面において結実化していくことになるが、もちろん、これら「救貧対策」の効果は微々たるものでしかなかったのは周知の事実であり、それどころか、「ルンペン狩り」や貧民街居住者の強制立ち退き、国策、戦時動員など

と、皮肉にも草間の良心からはほど遠く、下層民に対する異端視(社会病理学の跋扈も含め)、差別意識を社会に植え付け、他方で資本による強搾取が平気でまかり通る政策としてこれらは貫徹されて行った。

この時代、草間と対照的な生き方をしながら当時の下層民を追い続けた人物が石角春之助である。彼は今でいう風俗ジャーナリストとでも言おうか、「江戸と東京」という名雑誌の編集者としても有名な人物である。昭和4年に発刊された「乞食裏譚」が「近代日本の乞食」という題で数年前に復刻された。これなど眉間に皺を寄せるのが好きな人にとっては辟易する作品であると思うが、「センチメンタリズム」な感性が随所にちりばめられつつも、決して深刻ぶらず、ごく自然と浅草の浮浪者群を描写するそれがなんとも魅力的な名作である。



晩年の石角春之助

「殊に一年中ロハ台を我家と心得、住宅の如く考えてゐる数百の浮浪者の如き、全身恰も蜂の巣をつついたように、全く活きながらのミイラ同様の乞食仲間にも、とろけるような恋物語があり、性の葛藤があり、忌はしい犯罪があり、喜ばしい友情があり、更らに資本なしの売笑行為が行なわれてゐることは、何人も想像を許さないことでありませう。況んや彼等の生活、そこから来る露骨な闘争、赤裸々な戦ひ、悩まし気な生存競争、そして、これ等を彩る安直な恋愛の葛藤など入り乱れて、華かなるべき浅草の裏面を遺憾なくさらけ出しております。(自序より)

と、浅草在住の石角は、この街の片隅に常に存在する浮浪者の姿に着目し、乞食社会の複雑な構造と、それぞれの生き様や生業を、その独特な視点から描写する。明治期に流行したきわもの的な貧民窟ルポの流れをくんではいらぬだろうが、今でいうオタク風な観察の執着には感服せざるを得ない。その執着心は石角の場合、同質的な共感や同情に根差したものであることが、よく読み進めるとなんとなく分かる。

「私はかつてかう言う事実を見ました。それは私の知人等が、ひどく貧乏し諸所を徘徊している中、金はなくなる、腹は空く、宿はなし、途方に暮れて浅草公園に一夜を明したが、ひも

じさは益々募って行く許かりです。それでも彼は、ベンチに腰を下ろした切り身動きもしませんでした。丁度二日二晩飲まず食はずにゐたのでした。彼は余りの苦しさに堪え兼ね見知らぬ男に対し、『五銭でも十銭でもいいから借して下さい、必ず返へしますから』と哀願して見ましたが、大抵の男は返事もせずギロッと睨んだ切り、『馬鹿野郎』と言はん許りにすたすたと行き過ぎるのでした。ところがそれを見て居た一人の乞食が、のこのこ近寄って、懐中から大福餅を三つとり出し、やらうと言ふのです。(略) 彼は大福餅を着物で、皮がむける程すっかり拭きとつて、少しづつ食って見ました。が少し食ひ出すと、急に穢なさを忘れ何時の間にか全部を食ってゐました。食ひ終へると、どうしたものか急に悲しさが込みあげて来ました。彼は遂に泣き出しました。(略) 殊に普通人が、烈しい軽蔑と、侮蔑と、嘲笑の的になつてゐる彼に対し、假令どれだけの者にしろ、又假令それが無価値のものであるにしろ、乞食の身で彼の危急を救はうとする心根が、不憫でならなかつたのです。」

作つたような美談であるが、えも言えぬ社会風刺である。

ほんの短かな文書の中で描かれている、文公も、幾公も、清公も、三猫も、猫吉も、武夫も、お勝も、お金も、ここでは悲惨さを通り越して、あっけらかんと最底辺で生き続けている。

石角は「乞食よ汝の名は幸福なり」(「乞食裏譚」の扉字)と、浅草の構成員としての彼、彼女らの生きる姿と死をそのまま受入れ、自らも乞食同然の生活を過ごしたという。彼には乞食イコール怠け者、悲惨な人々というステレオタイプの発想ではなく、逆に浅草の地で生きづく様々な命の足跡を物語化することで、乞食もまた同じ都市生活者であることを

示し得た。野たれ死にを繰り返す人々には深く同情し「何れにしましても、哀れむべき彼等の多くを救ふことは、社会政策上の重大な問題であると同時に、最早研究すべき時ではありません。速ちに救ふ時です。」とは言うものの、やれ貧困問題だ、やれ社会政策だとは声高には叫ばない。また、今日、巷であふれている「ホームレス物語」のよう人の転落ドラマを強調したり、やれ人権だ、やれ対策だ、ということも言わない。それだけ彼の視点は深く下層に釘付けられていたからである。

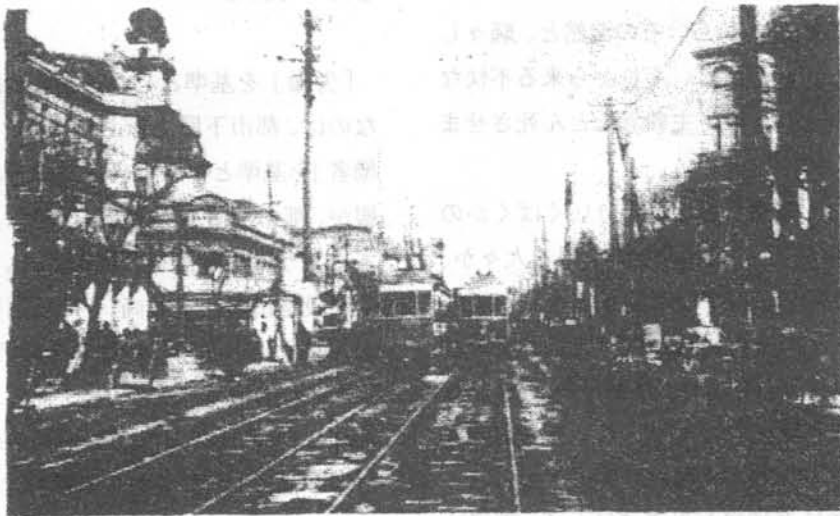
草間と石角では、同じ下層を探求しても、その感性、社会（己）と対象との距離の取り方の違いは明らかである。草間の嘆きと石角の嘆きの違いが、この「取り残された下層」をどう把らえるのかの違いとなる。

世間ではこれら下層の人々、とりわけ最下層の人々などは、失業問題一般としてはもちろんとらえない。失業問題としてとらえるのは、大工場などが合理化され「工場労働者」が首を切られ「労働運動」などによって何等か

のアプローチがあった時だけである。失業というのは「工場労働者」を主体とした概念であり、日々失業を余儀なくされる日雇い等はこの範疇には入り得ないし、最下層は尚更である。「取り残された下層」がいかにか体よく搾取され、いかにか絶対的貧困の淵に立たされていようとも、あくまで「社会の落伍者」であり、自業自得がなせる業とされて来た。すなわち、「労働問題」として、または階級支配の問題としてはこの層全体は語られなかったのである。かくして「貧困」は同情的な社会事業、社会政策の対象となった。「貧乏で何が悪い」と居直る社会批判は上昇志向を続ける世間の闇に埋もれた。下層は支配的にと同時に主体的にも下層にさせられたのである。

他方で、乞食社会を最底辺とする都市下層と日雇労働者など「下層労働階級者」とはまるで違うんだ、片や浮浪者で片や労働者であるという区別ほど意味不明なものはない。

実態は、「賃金労働者」であるかかないかなど、この世界にとっては、さしたる違いとは写らない。石角は震災前の日暮里の共同住宅



明治末期の銀座通り 尾張町(現・銀座4丁目)交差点の風景。銀座通りは東京市区改正新設計の第1等道路第2類第1(幅員15間=27.3m)であった。

表1 被支配階級の構成

| | 1888年 | 1899 | 1909 | 1914 | 1920 | 1925 | 1930 | 1935 |
|----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|
| 合計 | 3,877,553 | 5,665,392 | 6,518,141 | 7,819,986 | 9,849,821 | 12,138,894 | 14,650,167 | 14,297,352 |
| (A) 貧農(戸) | 2,954,843 | 3,524,000 | 3,608,059 | 3,724,984 | 3,801,973 | 3,825,565 | 3,856,677 | 3,878,521 |
| (B) 自営業(無税)(戸) | 721,046 | 612,113 | 700,538 | 631,078 | 911,661 | 461,630 | 442,381 | 397,617 |
| (C) 労働者(人) | 136,208 | 1,426,048 | 2,439,958 | 3,024,973 | 4,588,188 | 7,191,079 | 7,821,818 | 8,175,200 |
| イ) 官営工場 | 9,915 | 28,680 | 170,153 | 169,630 | 187,593 | 154,544 | 138,596 | 112,692 |
| ロ) 民間工場 | 62,624 | 423,171 | 821,303 | 1,009,456 | 1,757,670 | 1,995,855 | 1,874,878 | 2,620,178 |
| ① 500人以上の工場 | 22,990 | 108,500 | 169,964 | 253,633 | 598,658 | 749,261 | 478,957 | 784,223 |
| ② 100人 | 23,259 | 124,300 | 175,311 | 225,525 | 377,454 | 436,481 | 485,416 | 583,258 |
| ③ 5人 | 16,375 | 190,371 | 476,028 | 530,298 | 811,558 | 810,113 | 910,505 | 1,252,697 |
| ハ) 鉱山関係 | 55,000 | 119,667 | 233,827 | 270,580 | 465,158 | 310,968 | 225,862 | 274,804 |
| ニ) その他の従業者 | | 816,716 | 1,146,816 | 1,375,386 | 1,598,859 | 2,231,501 | 2,795,434 | 2,286,311 |
| ホ) 日雇 | | | | | 95,789 | 1,270,571 | 1,322,527 | 2,136,954 |
| ヘ) 失業者 | | | | | 224,605 | 914,251 | 366,799 | 356,557 |
| (D) 国鉄従業者 | | | 85,176 | 114,513 | 152,600 | 194,923 | 203,430 | 195,573 |
| ヘ) 電信電話 | 8,669 | 37,814 | 82,683 | 85,408 | 105,914 | 118,466 | 141,092 | 192,131 |
| (E) 事務労働者(人) | | | | 53,918 | 77,958 | 79,870 | 753,200 | 1,000,000 |
| (E) 下級公務員(人) | 65,456 | 103,344 | 151,727 | 385,033 | 520,041 | 580,750 | 776,091 | 846,014 |
| イ) 国 | 17,988 | 30,949 | 100,558 | 135,762 | 201,102 | 194,077 | 348,631 | 381,598 |
| ロ) 地方 | 38,799 | 34,581 | 51,169 | 49,350 | 60,425 | 73,284 | 82,938 | 76,712 |

大橋隆憲編著『日本の階級構成』岩波新書、1971年、p. 62

を次のよう描写している。「この長屋は楽屋裏の如く、大部屋、中部屋、上部屋の別がありまして、各自の収入のたかによつて、或は中部屋に、或は上部屋にと、思ひ思ひに陣どるのです。(略)殊に一畳一畳毎に、鍋から茶碗まで備えつけてありますから、チビクリやるのは各自の勝手に属します。かう言う風に至極便宜に出来ておりますが、一室に四五十人からの自由労働者達が何等の境界もなく雑居してゐるのでありますから、その混然と、騒々しさと、そして、不潔と、それから来る不快なる所の臭気とは、衛生主義者をとん死させます」

不安定な「賃金労働」によりいくばくかの稼いだ現金によって生活の糧を得る人々か、「賃金労働」以外の手段で生きてきたか否かであるが、結局その生活形態はさほど変わりはない。肉体労働で怪我や病気をしたり、年を取れば乞食になり、若い乞食が肉体労働者となりと言った風に、都市下層にとって乞食はさほど特異な世界ではなく、下層社会につらなる隣人の世界でしかなかったと言

えよう。

「賃金労働者」は底辺下層の大池の中から釣られ、作られて来ただけの存在である。それ以前は「賃金労働」などなくても人々は働き、生活の糧を得、助け合いながらも生きて来た。その生業が専門的であればある程、相対的な安定が計れるだけの話して、専門的であろうが、なかろうが、人々はやはり生きてきたのである。

「労働」を基準とした不毛な論議より重要なのは、都市下層から上昇分離した「工場労働者」を基準とした都市住民の平均的な価値観が、都市下層を異端視、排除する視点を有するようになった事ではあるまいか。産業の発展段階においても尚、その雇用構造の二重化(建設土木産業における重層の下請構造、重工業における「臨時工」「社外工」に代表される)の中、日雇労働や都市雑業(家内労働も含め)が産業から位置付けられて、需要があり、市場があったにもかかわらず、都市下層が従事する日雇労働や家内労働は下位

の労働とされ、伝統的な雑業に就き生業をする人々は、時代の意思として、働かない浮浪者、怠け者とされてきたことである。この構造は被差別民や賤民に対する歴史的な差別感とあいまり、資本主義確立時においては尚更増幅されることとなる。すなわち、この価値観は、都市下層から「工場労働者」を育成させる上で重要な価値観であった。自然に対応した農民の労働観を有する人々をいかに時間の規律の中で賃金労働者にしていくのか、この過程で必然的に「工場労働者」以外の働き人の価値を引き上げる必要があったのである。有名な話としてアメリカの富豪カーネギーが「一人の男にしろ女にしろ、物乞いをして安楽に生きることに成功する者は、論議好きの20名の社会主義者よりも、社会にとって危険であり、人間性の進歩のためには大きな障害である」(「富の福音」)と語ったのも、資本家がどこに利潤の源泉があるのかを知り、それに反する者への憎悪から発せられた言葉である。こう言いながら、下層に「労働者」を見いだす場合は常に不安定就労、強労働、肉体単純労働であり、まさに使い捨て自由の利潤の源泉として階層としての価値を見いだして来た。そして、いらなくなったら下層にポイと捨て、浮浪者にされるのである。

都市下層への蔑視、差別というのはこのように資本主義的に確立した。歴史的な身分差別をも孕んだ、言うなれば二重の差別構造の中、「働かざるもの食うべからず」的な賃金労働=「工場労働者」を基準とした価値観が一般的な労働観へと変遷し、日雇など不安定な賃金労働者、失業者、都市雑業者、浮浪者などをまとめて社会の外へと突き放す過程を辿り、その結果が、不良住宅の取り壊しであり、貧民街やドヤのゾーニングの発想であり、「ルンペン狩り」と称した狩り込みであり、他方におけ



るタコ飯場などに象徴される、前近代的な強搾取、国策動員、そして棄民化であった。

下層の民は「汝の名は幸せなり」とついに社会からは言われなかったのである。

図式化して考えてみると、工場労働者においては、資本主義的な搾取を貫徹させ、それ「以下」の労働者などには、それに加えた半封建的な搾取を様々な形(生産点のみならず生活過程全般においても)で強要したことこそ、日本資本主義の力の源泉であったとも言えよう。こうして都市下層の貧困の問題は、単なる「不幸」の問題ではなく、階層的に封じ込められた貧困、すなわち、「不幸」を起因としながらも、そこから抜け出せない貧困という質に転化した。都市社会の構成員でありながら、構成員としては見なされない。このおかしな構造の中に都市下層民は組み込まれていくのであった。

(つづく)

第5回越冬諸準備にカンパを!

夏が過ぎあつと言う間に越冬の準備をしなければならない季節になりました。98～99第5回新宿越年越冬の取り組みは、例年以上に厳しい越冬が予想されます。「仲間の命は仲間の力で守る」この越冬原点に戻った取り組みを強化し、仲間の力を思う存分発揮した冬将軍とのたたかいを邁進して行きたいと考えています。毛布、衣類などの配給も11月から集中的に行ない、今年は早め早めの体制を取って行くつもりです。

越冬のための、衣類、毛布、ホカロンや医薬品など、不要になったものなどありましたら、今年もまたお願いいたします。山谷労働者福祉会館宛てにお送り下さい。また、炊き出しなど、冬を越すためにはかなりのお金も必要です。こちらのカンパも引き続きお願いいたします。

(事務局一同)

*カンパ送り先

郵便振替口座 00170-1-723682「新宿連絡会」

*物品カンパ送り先

東京都台東区日本堤1-25-11山谷労働者福祉会館気付け 新宿連絡会

会計報告(98年8月～9月)

| 収入 | | | 支出 | |
|--------------|-----|-----------|-----------|---------|
| 郵便振替カンパ | 18口 | 315,230 | 炊事関連費 | 131,436 |
| 通信会員費 | 6口 | 23,000 | 交通費 | 169,390 |
| 路上カンパ・通信売上など | | 69,050 | 印刷代 | 17,424 |
| | | 計 407,280 | コピー・DPE費 | 23,083 |
| 収 支 | | -76,896 | 文具・図書費 | 15,174 |
| 前期繰越金 | | 911,008 | 発送費 | 33,410 |
| 次期繰越金 | | 834,112 | 車両燃料費など | 11,714 |
| | | | 電話代(7～8月) | 23,629 |
| | | | 会場費、使用料など | 32,900 |
| | | | 雑費 | 14,564 |
| | | | 全都実分担金 | 11,452 |
| | | | 計 | 484,176 |

編集後記

笠井論文、写真館と共に幕を開けた新生ダンボール村通信も、残すところ2号となりました。次号仕事特集の後半は、「路上の仕事」を予定しています。

ますます寒くなってきましたが、お体には気をつけてお過ごしください。

編集・発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を
求める連絡会議(新宿連絡会)

連絡先：☎111 東京都台東区日本堤1-25-11
山谷労働者福祉会館気付

☎ 03-3876-7073

☎ FAX 03-3876-1869

現地：☎ 030-818-3450